



認知症医療と介護施設の現状と課題：全国横断調査の結果を中心に

著者	吉村 敦子
発行年	2020
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2019
報告番号	12102甲第9551号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00160986

氏 名	吉村 敦子
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	博甲第 9551 号
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	認知症医療と介護施設の現状と課題 -全国横断調査の結果を中心に-
主 査	筑波大学教授 医学博士 田宮 菜奈子
副 査	筑波大学教授 博士（医学）太刀川 弘和
副 査	筑波大学准教授 博士（医学）笹原 信一郎
副 査	筑波大学准教授 博士（医学）石井 一弘

論文の内容の要旨

吉村敦子氏の博士学位論文は、これまで明らかになっていなかった認知症の療養の実態、とくに各施設の機能の差異に着目し、各施設へのアンケート調査の分析検討を行った研究で、各施設の認知症ケアの実態を比較検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者は先行研究を概観し、急増する認知症高齢者に医療・介護サービスを効率的に提供するためには、精神科医療、身体科医療、介護の各領域におけるサービス提供機関の明確な役割分担と連携が不可欠であるとし、認知症医療と介護における機能分化の実態を明らかにすることを目的に、研究を行ったものである。

（方法）

著者の研究は、認知症の医療と介護を横断した全国調査（「認知症の実態把握に向けた総合的研究（研究代表者 朝田隆）」）に基づき、それをさらに分析、発展させたものである。著者は、同調査のデータの集計、仮設に沿った解析方法の検討、統計解析に携わり、研究班の許可を得て、認知症医療と介護施設の機能分化の実態を明らかにするために、本研究を行っている。

調査対象は認知症に対応する医療機関と介護施設であり、病院は一般病床、精神病床、療養病床、介護施設は特別養護老人ホーム（特養）、介護老人保健施設（老健）、認知症対応型共同施設介護（グループホーム）、地域密着型介護福祉施設（地域特養）を対象としている。

同調査は、2009 年度から 2010 年度にかけて実施され、調査にあたっては、2009 年 12 月 1 日に質問票を 7,200 の対象施設に送付している。集計と分析作業には、統計ソフトの SPSS ver.18 を用いている。施設種ごとの個人特性の差異を検討するため、介護保険の主治医意見書中の身体と認知機能のレベル評価を数値化して分析に用いている。年齢、認知症重症度、寝たきり度の平均の比較は、一元配置分散分

析により施設種ごとの個人特性の有意差の有無を検定し、次に、Tukey の多重比較により、有意差を示した施設種を特定している。年齢階層、男女の割合、寝たきり度や認知症重症度のレベル別の割合、BPSD 保有者や経管栄養実施者の割合等については、施設種ごとにクロス集計を行い、カイ二乗検定により施設種間における有意差の有無を検定し、残差分析により有意差が示された施設種を特定している。

すなわち、著者は、施設種ごとの患者特性を比較することで患者の棲み分けの状況を分析し、機能分化の実態把握を試みたものである。

（結果）

2010 年 12 月 20 日までに 662 病院と 1,516 介護施設から回答を得て、回収率は 30%であり、病院と介護施設をあわせて 6,259 名分の個人票を得ている。

認知症患者の平均年齢、寝たきり度と認知症重症度の平均値は、施設種ごとに有意差が示されている。著者は、精神病床以外のすべての施設種における平均年齢は、調査時点（2009 年）の平均寿命である 82.59 歳よりも高いことを指摘している。また、年齢階層、男女の割合、認知症重症度のレベル別の割合、BPSD 保有者の割合、経管栄養実施者の割合、点滴実施者の割合、認知症の基礎疾患別の割合において、施設種ごとの有意差が示されている。そして、著者は、施設種ごとの個人特性には施設機能に概ね沿った差異が見られ、施設特性に応じて患者の棲み分けがあり、機能分化されていることを明らかにしている。

さらに、著者は、精神病床は、重度認知症者が占める割合、BPSD 保有者の割合、79 歳以下が占める割合が、他施設種に比べて有意に高く、64 歳以下の若年性認知症患者が 5.7%を占めていることを明らかにし、若年の傾向を有する精神病床の患者特性は、80 歳以上の女性が約 8 割を占める介護施設の特性とは明らかに異なることを指摘している。また、療養病床では、経管栄養実施率と寝たきり度の重度者が占める割合が他施設種に比べて有意に高いことを明らかにした。そして、著者は、精神病床と療養病床における入院期間の 1 年を超える長期傾向を指摘した。

（考察）

著者は、研究の結果、認知症に関わる入院医療・入所介護サービスの提供機関においては、施設の本来機能に概ね応じた機能分化がなされていることを明らかにしている。

著者はまた、精神病床は若年性認知症患者、BPSD 保有者、重度認知症患者の対応などの精神科医療機関としての機能を果たし、療養病床は医療処置と長期療養を要する患者の対応という施設機能を果たしている一方で、両病床の入院の長期化には、両病床の患者特性に対応可能な介護施設の不足が一因している可能性を指摘している。そして、介護力のある介護資源の拡充が、入院長期化の解消に寄与する可能性に言及し、2018 年に創設された介護保険系の施設類型である介護医療院が両病床からの退院患者の受け皿のひとつになりうるとして、今後の展開を期待している。

審査の結果の要旨

（批評）

本研究では、これまで実態が不明であった認知症の療養の実際について、全国レベルのアンケート調査により、各施設における療養の特徴（在院日数、基本属性、医療処置など）を明らかにし、各施設が、それぞれの役割・機能分化を果たしていること、一方では医療ニーズに対応する療養の場の不足も明らかにしたものである。超高齢社会において喫緊の課題である認知症について、現状の数字に基づく知見を示し、かつ今後の課題について整理した、社会医学的に大変意義のある研究である。

令和 2 年 3 月 3 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、認知症の判断基準や、現在の状況との関係などの関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、適切に対応がなされ、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。